

JELC NEWS

ジュラ ニュース 第28号 2012年 8月15日発行 発行責任者 森川 博己

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援/アジア子ども支援/ブラジル子ども支援/ボランティア派遣/リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座/奨学金制度/宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

「お前たちは、わたしが働いているときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ、はっきり言うておく、私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」 マタイによる福音書 25章35節～36節、40節



カンボジアで有意義な十日間をすごしました!

4回目となるカンボジア・ワークキャンプを2月に実施しました。派遣したのは男女6名。JELC(日本福音ルーテル教会)が加盟しているメコン・ミッション・フォーラムのメンバー教会であるシンガポール・ルーテル教会の協力を得て、コンボンチュナン地区(プノンペンの北西)にある村の学校の修繕を中心に奉仕活動を行いました。同じ地区にある、LWM(Lutheran World Mission=ルーテル世界宣教)が運営するライフセンターでは、支援が必要な村人への奉仕活動にも加わり、交流の時間を持つことができました。カンボジアの歴史・文化や人々と触れあいながら、参加者たちは有意義な十日間を過ごせたようです。写真とレポートは6ページ以下をご覧ください。

【この号にはこんな記事が】

<東日本大震災被災者支援>感謝を伝えるアメリカへの旅(佐藤智恵+松野朱莉+岩佐奈保) ……2～3 たのしい熊本の高校生活(サクラ・エステル) / 保育士をめざして(佐藤和香) ……4 第9回世界の子ども支援/東日本大震災復興支援チャリティコンサート実施報告 ……5 <その他> カンボジア・ワークキャンプ2012参加者の声 ……6 共にあること(リラ・プレカリア研修終了生 崎山たまも) ……7 お知らせ(難民に日本語を教えてくださいませんか?/賛助会員募集/支援者一覧)・編集後記 ……8

感謝を伝えるアメリカへの旅

この3月に3名の高校生と米国ミネソタ州を訪れました。昨年の3月11日以降、ルーテル教会その他の米国のキリスト教会、元日本宣教師の先生方やそのご家族ご友人から、東日本大震災被災者のために使ってくださいと多くの寄付金がJELAに送られてきました。この寄付金で学校に通い続けることができた仙台の高校生3名は、寄付して下さった人々に直接会ってお礼を言いたいと、ずっと思っていました。ようやくその機会が訪れたのです。米国訪問時に高校一年生だった岩佐奈保さんは、この4月から二年生となり、三年生だった佐藤智恵さんと松野朱莉さんは、二人とも希望の大学に進学できました。ご家族の喜びもひとしおでしょう。三人とも外国に足を踏み入れるのは初めてということで、今回の旅は特別な経験になったようです。一人ひとりの思いを以下の感想文から読みとっていただければと存じます。

(JELA 事務局長・森川博己)

東北学院大学文学部歴史学科1年生
佐藤 智恵

○アメリカで得た宝

アメリカにおいて、私は三人を代表して感謝のスピーチを行うという役割を担っていたわけだが、このスピーチを通して沢山のひとと心の距離を縮めることができ、そして沢山の励ましの言葉を貰い、心が温かくなった。沢山のひとたちと交流を持った経験、そして一人ひとりの強い思いを感じられたことは、私の宝である。

○忘れられていなかった「東北」

スピーチで「東北を忘れないでいてほしい」という思いがあることは述べた。アメリカに行く前の私は、被災地東北は世界から見れば日本という小さな国の、またさらに小さな地域という認識なのではないか、だからとっくに忘れ去られているので

はないかという勝手な考えから、アメリカに行くことに少なからずの怯えがあった。だが実際は、そうではなかった。アメリカではほぼ毎日、様々な教会を回ったが、その度に沢山のひとたちが温かい心をもって、独自の最高のもてなしを我々にしてくれた。そして東北のために涙し、祈ってくれた。被災した東北、そして我々のことを忘れてなんかいなかった。これは本当に嬉しかった。涙が出るほど。ある教会で『小さな世界』(It's a small world)を歌ってくれた。世界はひとつで、せまくて、そして同じ、みんなが助け合っているといった歌詞であるが、本当にそう思う。



○さまざまな分かち合い

私がアメリカ、ミネソタで得たもの、それは目に見えるもの、見えないもの、本当に沢山の物を会ったみんなからもらった。様々なひととの交流を通して印象に残っている言葉がある。それは「分かち合う」という言葉。少なくとも二回はこの言葉を聞いている。ひとつ取り上げれば、思い出すのも辛いであろう震災での痛みを私たちと分かち合ってくれてありがとう、といったものだった。誰かと痛みを分かち合うというのは、なんだかとても難しい気もする。でも、半分でも、その半分でもない、一日一日本当に少しずつではあるが、沢山のひととスピーチや交流を通して、痛み、そして悲しみを分かち合ってもらった。また、それだけではなく、暖かい心も分けてもらった。これには本当に感謝している。そのような意味でも、人は一人では生きていけない、近くは勿論、遠くの隣人を意識しながら生きることが大切だと思った。

○アメリカでの経験を支えに

アメリカで出会った沢山のひとが、震災で悲しみに満たされていた私の心を、温かい気持ちをもって包み込んでくれた。みんなが東北を思い、祈ってくれていたことを肌で感じ、とても嬉しかった。ありがたい。生きていてよかったです、心の底から思う。これからも様々な苦難があると思うが、でも、そんなときには必ずアメリカで出会ったひとたちのことを思い浮かべよう。そうすれば、みんなが背中を押してくれているような気がするから。

尚綱学院大学総合人間科学部
現代社会学科1年生
松野 朱莉

□苦労した英語

10日間に及ぶアメリカ訪問から日本に帰って来た時、私には言い知れぬ安堵感と同時に少しの寂しさが胸の中に渦巻きました。思えば私は、初日から様々な不安を抱えていました。外国に行くのは人生で初めてのことで、加えて英語を話さなければいけないというのが私にとっては最大の壁でした。2日目はおもに飛行機で長時間移動しましたが、3日目は初めての海外の教会とホームステイといったスケジュールでした。ホストファミリーの方とコミュニケーションを取りましたが、ほとんどジェスチャーでしか話せていないのが現状でした。予想はしていたものの、私自身のあまりの語学力の無さに情けないと思います。帰国したら大学でもっと英語を勉強しようと思いました。

□日本との共通点

4日目は近くの高校見学。3日目とは別の教会に向かった後、最後のホームステイ先にお世話になることになりました。昨日お世話になったホームステイ先の方にハグしてお礼を言い、高校を見学することになりましたが、ここでは日本と海外には互いに共通点があると思いました。アジア系の方やネイティブ系の方まで人種に

関係なく、笑いあって過ごしている、真剣に授業に取り組んでいるという点はどの国においても変わらない共通点なのだと感じました。

□飢餓対策 NGO での体験

5日目は朝食を私達3人とホームステイ先の方と一緒に作ったのと、NGOでの体験が印象的でした。初めにビデオを見せられましたが、そこでは世界中で本当に飢えている子供達に食べ物を送るために、実体験で食料を袋に詰める作業をこなすことになりました。私自身、初めのうちは飢餓状態になっている子供のために頑張ろうと意気込んでいました。ですが、しばらくした後段々と手が痛くなっていき、少し疲れたとかまだ終わらないのかと考えている自分がありました。今思っても本当に情けない話です。世界中の飢えている子供は私以上に苦しみもがき、死と隣り合わせの現実に向き合っている。今も昔も普通の生活をしている私ですが、この生活が出来ること自体幸せなことなのだと身に染みました。

この訪問に至るまで支援して下さった方々には感謝しております。そして、こうして面と向かってアメリカの支援者の方々と話せる機会を作って下さった JELA の皆様方にも感謝しております。どうもありがとうございました。

尚綱学院高等学校2年生

岩佐 奈保

●隣人を自分のように愛しなさい

私にとって、初めての海外旅行はとても感動に満ちたものでした。ミネソタの大自然は私の心を癒してくれました。最初に訪れたホサナ教会は、雰囲気がとても明るくて、心が温かくなりました。その礼拝に参加した際、牧師さんと信者さん達が私たちの方を見て、お祈りをして下さいました。それを見て私は、こんなにも大勢の方に支えられているのを肌で感じ、感激のあまり涙が出そうになりました。その時私は聖書のある言葉を思い出しました。それは、「隣人を自分のように愛しなさい」です。この言葉はまさにこの状態のことを言うのだと思いました。同時に、「見えない誰か」を愛することとはどういうことなのか分かりました。

●与えられる側の喜び

私は尚綱に入学して、花の日礼拝や収穫感謝礼拝で集まった捧げ物を病院や施設に届けるということをしました。届ける際、一緒に歌を歌ったり、お話ししたりしても、与えられた側の気持ちをあまり深く考えたことはありませんでした。届ける側の私としては、相手が少しでも喜んでくれれば良いなとしか考えていませんでした。今回アメリカに行って、私達のために祈ってくれたり、

ホームステイをさせてくれたりなど、与えられる側の喜びや愛をものすごく感じました。

●自分の意見をもつことの大切さ

また、アメリカに行って学んだことは、自分の意見を持つということがどれだけ大切かということです。ホームステイでお世話になっているとき、何がしたいか、どう思っているのかなど何度か聞かれましたが、悩んだり考えたりして中々答えが出ませんでした。普段私は、大勢の中で意見を求められたとき、多数派にいつも従っていました。自分の意見を発することにより、周りからの視線が気になってしまい、結局何も言えなくなってしまうことがほとんどでした。そんな自分に嫌気が差していましたが、アメリカ人との交流で、自分の意見を言う大切さを学びました。頭の中で考えていたり思っているだけでは、相手に何も伝わりません。自分の気持ちを言葉にきちんと表さないと何も伝わりません。支援していただいたことの感謝の気持ちや、ホームステイのお礼を何一つ伝えられなかったのが残念でした。もし機会があれば、次に皆さんにお会いした時に、自分の気持ちを伝えられるように大の苦手の英語をがんばりたいと思いました。

今回の企画に携わって下さった方々に深くお礼を申し上げます。本当に、ありがとうございました。



セントルーク・ルーテル教会にて

[福島放射線禍を逃れて]

福島の高中生が放射線汚染を気にせず勉強できるようにと、熊本のルーテル学院高等学校は、福島県の高校に通っていたサクラ・エステルさん（両親はアフリカのルワンダ出身）を昨年4月に転校生として受け入れました。JELAは被災者支援の一環として、彼女の学費その他を転校当初から支援しています。最近本人から届いた以下の便りによると、新しい環境にもすっかり慣れた様子うかがえます。

たのしい熊本の高校生活

ルーテル学院高等学校2年生

サクラ・エステル

いつも暖かい支援をありがとうございます。皆様の温かい支援のおかげで、私はルーテル学院でのびのびと一年間をすごすことができ、今も明るく、楽しく毎日を送っています。

私は今、ルーテル学院の二年生で、理数特進というクラスに在籍させていただいています。今年で二年目で、友達とも仲良く過ごすことができます。

理数系の教科は二年になり授業数が増えたこともあり、進むスピードがはやく、内容も濃くなり、今は内容を理解することで精いっぱいな状況ですが、優しい先生方のおかげで頑張っています。授業中はさわりたりすることもありますが、つねにしっかりノートをとったり、分からないところはすぐ質問したりすることを心がけています。

勉強だけでなく、最近は学校行事でルーテル高校と姉妹校である「新興（シヌン）高校」（韓国にある）との交流行事があり、とても楽しく参加したことを覚えていますし、福島の高校にいた時とは違う行事がありと



クラスメイトと、中央がエステルさん

でも新鮮で、一年生の時とは違う参加ができると思うとわくわくしています。

寮では後輩や先輩の投票により、寮長という重役を任されることになりました。ちゃんどできるかとても心配ですが、リーダーシップを持って行動をすることで、後輩や先輩、寮の先生に、今まで同様これからもかけるであろう迷惑を、少しでも減らしていきたいと思っています。

最後に、私の将来の夢は、今現在では看護師の資格を取り、全世界でグローバルに活動することです。まだいろんな職業に興味があり、ちゃんとした夢は決めていませんが、どんな職業にでもつけるように、しっかり勉強していきたいと思っています。これからもJELAの皆様には迷惑をかけると思いますが、温かい支援をよろしく願います。

地元の保育士をめざして

尚綱学院大学総合人間科学部

子ども学科2年生

佐藤 和香



●震災の家族生活への影響

私は現在、保育士になるために大学へ通い勉強しています。昨年の東日本大震災で私の実家（福島県南相馬市）は、原子力発電所の30km圏内にあるため緊急時避難準備区域となってしまう、一時避難をしていました。祖父母、母、伯父、姉、私、弟の7人家族でしたが、以前に脳梗塞で倒れて左半身麻痺となり透析が必要な伯父は、通院していた病院が一時閉院となってしまう、福島市の病院での透析となったことから、祖母と共に福島市へ移りました。高校に入学した弟は、入学予定だった高校が閉校となってしまう、福島市にある姉妹校へ通うために、福島市内で一人暮らしをすることになりました。姉は福島市の大学へ通っており一人暮らしをしていましたが、私も大学入学と同時に仙台市内での一人暮らしを始めたため、家族が5カ所に別れことになりました。現在は状況が落ち着いたため、祖父母、母、伯父は実家で生活しています。

●勉学と生活の支え

このような状況のもと、私は大学へ入学しましたが、母子家庭で決して裕福な家庭ではないため、学費の納入が難しくなっていました。そんなとき、日本福音ルーテル社団さまの学費支援のお話を聞き、面談をしていただき、支援していただけることになりました。もし、日本福音ルーテル社団さまからのご支援を受けることができなければ、今日まで大学へ通えていたかも分かりませんでした。学費支援をしていただいているおかげで、母への負担を軽減することができ、私自身も勉強に集中する環境を整えることができました。たくさんの人に支えられて学んでいるという意識を持ち続けることによって、向上心を強く持てるようになりました。日本福音ルーテル社団さまのご支援は私や家族にとっても大きな力となっています。

●保育士として地元のために

私自身、たくさんの人に支えられて大学生活ができていますので、将来は保育士として、地元・福島子どもたちや保護者の支えになりたいと考えています。原子力発電所の影響を受け、たくさん子どもたちや保護者の方たちが市外、県外に避難・移住してしまいました。ですが、残っている子どもたちも少なからずいます。避難した子どもにとっても、しなかった子どもにとっても、自身を取り巻く環境は大きく変わってしまいました。住む家を失った子、住む場所が変わった子、親を亡くした子、孤児になってしまった子、友達を失ってしまった子、それぞれの子どもたちが置かれている状況はさまざまですが、小さな体にふさわしくないほどの大きなストレス・重圧を背負っていることに変わりはありません。それは子どもたちだけでなく保護者の方たちにも重くのしかかっているのでは、と思います。そのような状況にある子どもたちや保護者の方たちのために、大学で身に付けたことや経験を生かし、保育士として働きたいと考えています。一人でも多くの子どもたちのストレスが緩和され、元気いっぱい、明るい笑顔が増やせるような保育士になれるよう、残りの大学生活もがんばってまいります。

第9回世界の子ども支援／東日本大震災復興支援 チャリティコンサート

5月11日から一か月にわたり、全国の日本福音ルーテル教会等11会場（蒲田、保谷、神戸、藤が丘、本郷、知多、沼津、大岡山、シオン、松本、ルーテル市ヶ谷センター）で第9回世界の子ども支援チャリティコンサートを開催しました。今回も昨年に引き続き、東日本大震災で被災された方々、とくに子どもたちのために寄付を募りました。

演奏者は、第7回・第8回のコンサートで好評をいただいた上野由恵さん（フ

ルート）と、今回初めて共演していただいた新井伴典さん（クラシックギター）。今年も二つの会場で園児向けのプログラムを用意しました。また本郷学生センターでは、3歳以下のお子さんのいるお母さんたちのためにコンサートを行い、母子ともに楽しい一時を過ごしていただきました。

会場で販売されたチャリティCD『讃美歌フルート名曲集＜アメイジング・グレイス＞』の収益は、すべて東日本大震

災被災地支援のために用います。一枚2千円（送料別）でご購入いただけますので、ご希望の方はJELA事務所にご連絡ください。

11会場（12公演）の来場者総数は約1070名、寄付金総額（チャリティCD売上を含む）は約98万円にのびました。会場を提供していただいた皆様、ご来場くださり寄付を捧げてくださった皆様、そして協賛団体の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



5月11日(金)蒲田教会・幼稚園



5月13日(日)保谷教会



5月19日(土)神戸教会



5月20日(日)藤が丘教会



5月22日(火)本郷教会



5月26日(土)知多教会



5月27日(日)沼津教会



5月29日(火)大岡山教会・幼稚園



6月1日(金)シオン教会徳山礼拝所



6月3日(日)松本教会



6月11日(月)ルーテル市ヶ谷センター(東教区共催)



★私たちがみんなで校庭のゴミ拾いをしている時のことです。最初は不思議そうに私を見ているだけだった女の子二人が、私の後について来てゴミ拾いを手伝ってくれました。土の中にビニールのお菓子の袋が埋まっていて、私がうまく取れないしていると、その女の子も協力してくれて取り出すことができました。(武内ひかり・川崎市)

★カンボジアのために、自分も大切だ、というので、(私がカンボジアにはないし、その私の課題として)にして過ごして(東京教会)

★子どもたちと交流するにはジェスチャーと会話の本『指さし会話帳』の絵を指して、文字が読める子に発音してもらおうといった感じでした。わたしはクメール語がわからない、彼らは日本語がわからない。けれどお互いの心はどこかでつながっている、そんな感じがしました。(関口美香・JELC 大岡山教会)

カンボジア・ワークキャンプ2012

参加者の声

レポート全文はJELAのホームページからご覧になれます
<http://www.jela.or.jp/cambodiareport2012.html>

★私が笑顔で日本語を発すれば相手も笑顔でクメール語を返し、それだけでなんとなく会話が成り立つ。笑顔は言葉を超え、人を癒すパワーがある。そんなことを毎日感じる日々でした。(堀川有理子・JELC 田園調布教会)

★学校が新しくなると、目を輝かせて校舎の完成を待つ彼らの様子はとても眩しく思えました。一人ひとりの働きは小さなものでも、ほんの少しでも役に立つことを願いながら作業を行っていました。(藤島杏奈・JELC 室園教会)

★私たちの国では食事を食べよう、何処に行こう? ストランへ行こう? など、それは「共に生きること」「何を食べよう、何を着よう、共に、そして貧しい者とごどだけでは語りきれない溢れるばかりの笑顔がまた見ついたら私たちも笑顔で(会牧師)



過去の過去や現在の状況をみんなが自分の周りの人たちと共有することが参加者との話し合いで出た。ボジョアの何かを変えられるわけでもないからこゝろからして人々に共有していくことを大切にしていきたいです。(高橋 奏・JELC)



★ワークを通して学んだことだが、人は決して一人では生きていけないのだと思った。これは作業の中で色々な人たちとペンキを塗ったり、プレイグラウンドを整備したときに思ったのだが、自分らだけでなく現地の人や学校の生徒が手伝ってくれたからこそ完成したのだと思う。(安部一朗・JELC 東京教会)



ひとつをとっても無数の選択肢がある。「何しよう?」。この村には「何を食べよう、何処のレンドの選択肢はない。だが別の選択肢がある。を選ぶ」という、人として最も尊い選択だ。よう?」の選択ではなく、「その日一日を神と共に生きる」選択がそこにはあるのだ。綺麗な状況もあるだろう。だがそこには何故かあるのだ。そしてそんな笑顔に癒されて、気分になっていた。(関野和寛・JELC 東京教

リラ・プレカリア (祈りのたて琴) 研修修了生からの便り



リラ・プレカリア研修講座は現在4期目に入っています。そして修了生のうち十名以上の方が、東京・千葉・埼玉・宮城にある計7カ所の病院・施設で、ハーブと歌による祈りの奉仕活動を実践されています。今回は、今年3月に講座を修了し、4月から東京都小金井市にある桜町聖ヨハネホームで奉仕訪問を開始された3期生・崎山たまもさんからの便りをご紹介します。

助さんが何度か口にされた言葉です。リラ・プレカリアの働きは、相手に感動を与えようというのではなく、「ただ共にいて、多くの祈りの中で作られた音楽を共有する場を提供する者となる」ことかもしれません。出会いの時に大切に思う気持ちと、先人たちの思い(祈り)を伝えようとする気持ちは、歌舞伎役者に通じるものがあるように感じます。

○心を静める

「……『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。……見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」(新約聖書・コリントの信徒への手紙「4章16節～18節」)。リラ・プレカリアの働きを始めて、人の表情・言動という見えるものに気配りが大切であっても、それに惑わされることがないように「心を静かにする」難しさを実感しています。私がどんなにボロボロの器であっても、恐れて逃げず、日々新たにされる「内なる人」、共にいてくださる方を信じ、大切な時にむけて練習するのみです。練習方法は2年間の研修で教えていただいています。

私のお世話になる桜町聖ヨハネホームではシスターが常に同行して下さいます。私の働きを何の批評をされることもなく、ただ共にいてくださるのです。一緒に歌ってくださったり、笑わせてくださったりします。なんと心強いことでしょう。このような心洗われる時間をあたえられていることに感謝します。



見守ってくれるシスターと

共にあること

リラ・プレカリア研修講座
第3期修了生
崎山 たまも

○心がゆるる

つい先日伺った方は、間もなく最後の時を迎えるだろうということで、ご家族が付き添われていました。看護師さんから「(ハーブと歌の奉仕は)短めに」とアドバイスがありました。私はベッドサイドでハーブを弾き始めましたが、彼女は落ち着かずハーブ越しにご家族の所在を確認されているようでした。ハーブの音も歌声も届いていないようで、私は5分ほどで失礼させていただきました。このあと私は、自分の心のあり方が「何か変だぞ」と思ったのです。彼女が希望していなかったからやめた? 数回ベッドサイドにおじゃまただけで彼女の気持ちがわかるというのか? 彼女を喜ばせに行ったのか? 私が良い気分になりたかったのではないかと……。死は時間の大切さを教えてくれます。残り少ない時間の方への奉仕者がこんな私で良いのか、と怖くなって逃げ出したような気もするのです。

○出会いを大切に

「一期一会」——、先ごろ襲名披露をされた歌舞伎役者の四代目・市川猿之